



TITLE:

# 陰茎癌と前立腺癌の重複症例

AUTHOR(S):

沼, 秀親; 富田, 雅乃; 保母, 光俊; 岡田, 耕市

---

CITATION:

沼, 秀親 ...[et al]. 陰茎癌と前立腺癌の重複症例. 泌尿器科紀要 1986, 32(9): 1303-1306

ISSUE DATE:

1986-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/118910>

RIGHT:

## 陰茎癌と前立腺癌の重複症例

埼玉医科大学泌尿器科学教室（主任：岡田耕市教授）

沼	秀	親
富	田	雅
保	母	光
岡	田	耕

A CASE OF PRIMARY MALIGNANT NEOPLASMS  
ASSOCIATED WITH PENILE CANCER  
AND PROSTATIC CANCER

Hidechika NUMA, Masano TOMITA, Mitsutoshi HOB0 and Koichi OKADA

*From the Department of Urology, Saitama Medical School**(Director: Prof. K. Okada)*

A case of a 79-year-old man with penile cancer and prostate cancer is reported. The pathological study of surgical specimens disclosed well-differentiated squamous cell carcinoma of the penis and poorly differentiated adenocarcinoma of the prostate. This is a rare case of multiple primary malignant neoplasms associated with penile cancer and prostate cancer.

**Key words:** Multiple primary malignant tumors, Penile cancer, Prostatic cancer

## 緒 言

近年、泌尿性器系を含む重複癌の報告例は増加している。ところが陰茎癌との重複癌の報告例はほとんどなく、とくに泌尿性器系腫瘍との重複例は稀である。今回、われわれは陰茎癌と前立腺癌の重複癌の1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

## 症 例

患者：79歳、男子、元和紙製造業

初診：1983年3月27日

主訴：陰茎腫瘍

家族歴・既往歴：特記事項なし

現病歴：1982年4月頃より陰茎冠状溝沿いにビランが出現し、次第に乳頭状に増殖発育する腫瘤を認めるようになったが放置していた。1983年3月、某病院よりたまたま陰茎腫瘍を指摘され当科を紹介、同年3月29日入院となった。初診時、排尿異常や尿所見の異常は認められなかった。

入院時現症：体格中等度、栄養良好で胸腹部理学所見に異常は認められなかった。陰茎亀頭部は仮性包茎を呈し、その冠状溝沿いにはほぼ全周性の易出血性乳頭状腫瘍を認め、癌苔で被われ悪臭を伴っていた。包皮への炎症や腫瘍の浸潤所見は軽微であった。直腸診では前立腺は正常大であったが、全体に軟骨様硬を呈した。両そ径部を含む全身のリンパ節は触知しなかった。

入院時検査成績：血液生化学では LDH 233 mU/ml, Al-P 350< mU/ml, Acid-P 57 K-A, PAP-RIA 259 ng/ml と高値および血沈1時間値 92 mm の促進を認めたがその他の値は正常であった。

X線学的検査：腹部単純レ線撮影で腰骨、腸骨の増殖性骨変化像が発見され (Fig. 1), 尿道造影像では、前立腺部尿道は硬く伸展した像を示した (Fig. 2). IVP では上部尿路に異常は認められなかった。

全身骨シンチグラム：<sup>99m</sup>Tc-MDP による骨シンチグラムでは全身骨への異常集積像を示した (Fig. 3).

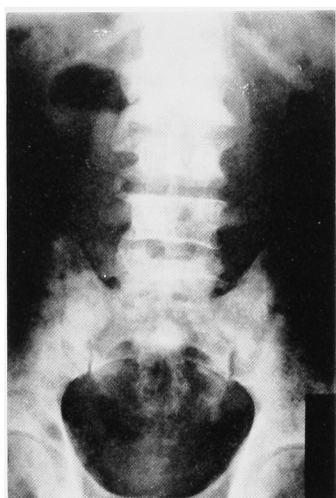


Fig. 1. KUB

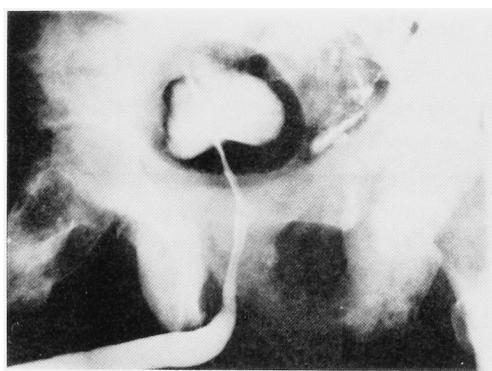


Fig. 2. UG

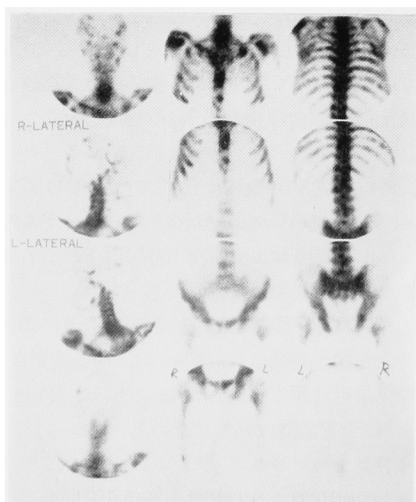


Fig. 3. Whole body bone scanning

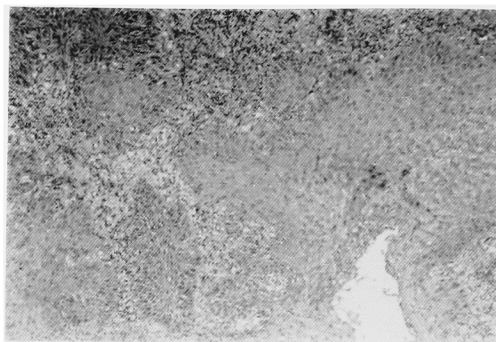


Fig. 4. Histological appearance of the tumor of the penis

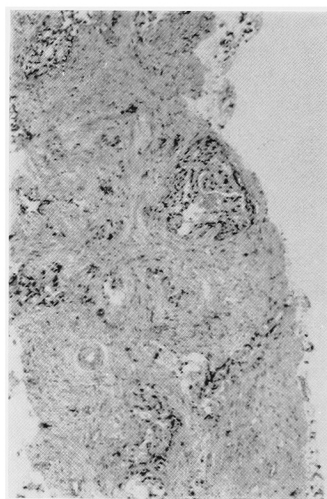


Fig. 5. Histological appearance of the tumor of the prostate

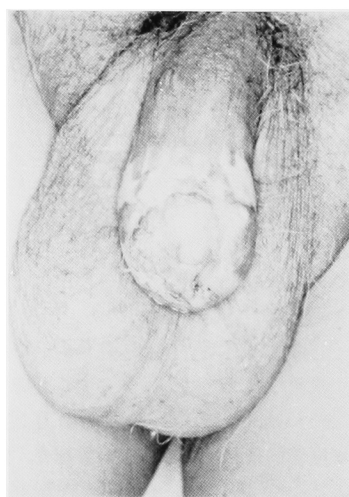


Fig. 6. Appearance of the penis after treatment

生検：陰茎腫瘍の一部切除，そ径リンパ節生検，経直腸前立腺生検が行なわれた。

病理組織診断：陰茎腫瘍は分化型の扁平上皮癌 (Fig. 4) で，前立腺は未分化型の腺癌 (Fig. 5) と診断された。両側そ径リンパ節生検による組織像では転移像は認められなかった。

経過：以上より stage A の陰茎癌と stage D2 の前立腺癌の重複癌と診断し，待期的膀胱瘻造設術を施行し，陰茎癌に対しリニアックとペブレオマイシンの同時併用療法を行ない，前者で 3,800 rad，後者で総量 60 mg を筋注した。一方 前立腺癌に対してはプロスタール 1 日 150 mg，PSK 3.0 gr，FT 顆粒 600 mg を連日経口投与した。その結果，全身骨増殖変化像と Acid-P 値の著しい改善は認められなかったが，陰茎癌は消退瘢痕化を著明に認め (Fig. 6)，膀胱瘻抜去後，同年 8 月 16 日退院した。病状の再発や悪化は認められず，外来通院加療中であったが，家人の都合で他所へ転居となり，1984 年 4 月死亡したとの連絡を受けた。

## 考 察

重複癌について，1971 年馬場ら<sup>1)</sup> は病理学的に基準を設け，多発癌・両側癌は除外し組織標本によって重複癌と確定診断したもののみが対象とされるべきだとし，Warren & Gates<sup>2)</sup> の基準内でさらに区分けを行なった。本例は馬場らの分類のうち異なる臓器に発生した癌腫・癌腫 (重複癌腫) に該当する。

本邦における陰茎癌との重複悪性腫瘍報告例は，われわれの検索した限り自験例を含め計 14 例 (Table 1)

で，そのうち 3 重複癌が 2 例存在した。陰茎癌のうち 12 例が扁平上皮癌であり，消化器系癌との重複が多く，その組織像は腺癌がほとんどであった。発生間隔が明確な 10 例のうち平田ら<sup>3)</sup> の言う 1 年以内に同時診断されたものは 7 例であった。泌尿器系間の重複例は自験例を含めて 4 例のみで腎 2 例，膀胱・前立腺との重複が各々 1 例ずつであった。管谷ら<sup>4)</sup> によると欧米では 16 例の陰茎癌との重複癌報告例があり，うち泌尿器系間の重複は 3 例を認めたとしている。

Sunder ら<sup>5)</sup> は重複癌患者は癌患者の 3.2% にみられ，そのうち泌尿器系を含む例は 12.9% で，泌尿器系間の重複は 3.4% であったと報告している。1983 年度の日本病理学検報<sup>6)</sup> によると，悪性腫瘍症例数は 24,673 例あり，重複癌患者 (3 重複，4 重複を含む) 数は 1750 (7.1%) 例，泌尿器系を含む例は 168 (9.6%) 例，泌尿器系間は 30 (1.7%) 例となっている。また陰茎癌については腎癌との重複 1 例を認めるのみである。

馬場ら<sup>1)</sup> の基準にもとづき，泌尿器系悪性腫瘍を伴う重複癌の報告例は荒木ら<sup>7)</sup> の 499 例，およびわれわれの蒐集し得た 29 例を加えると計 528 例となる。臓器別では膀胱が 48.8% で最も多く，以下前立腺 (19.0%)，腎 (16.0%) であり，重複臓器では消化器系が 64.8% と最も多く，膀胱との重複は 30.7% を占めた。528 例のうち泌尿器系間の重複は 108 例で膀胱と前立腺が 36 例，以下膀胱と腎 27 例，腎と腎盂尿管 22 例と多くみられた。

荒木ら<sup>7)</sup> によると重複癌の発生間隔は平均 4.4 年であるが，1 年未満に発見診断される率が高く，また単

Table 1. 本邦における陰茎癌との重複悪性腫瘍報告例

No.	報告者	報告年	年齢	陰茎腫瘍組織	重複腫瘍臓器	重複腫瘍組織	重複腫瘍の発生間隔
1	中 川	1957	64	扁平上皮癌	胃	充実癌	3 ヶ月
2	本 庄	1958	42	扁平上皮癌	鼻腔硬口蓋	円形細胞肉腫	不明
3	北 畠	1960	60	癌腫	腎	腎悪性腫瘍	4 年
4	中 村	1960	61	扁平上皮癌	直腸	腺癌	同時
5	三 橋	1963	71	棘細胞癌	鼻翼皮膚	基底細胞癌	同時
6	(日大)	1965	不明	扁平上皮癌	胃	腺癌	不明
7	高 安	1970	75	扁平上皮癌	膀胱 歯齦	移行上皮癌 扁平上皮癌	不明
8	松 村	1978	80	Paget 病	肝	肝細胞癌	11 年
9	小 林	1979	73	扁平上皮癌	胃 上行結腸	未分化腺癌 腺癌	不明
10	野々村	1979	71	扁平上皮癌	直腸	腺癌	同時
11	菅 谷	1982	74	扁平上皮癌	S 状結腸	腺癌	同時
12	和 田	1982	66	扁平上皮癌	胃	腺癌	1 ヶ月
13	小田島	1983	51	扁平上皮癌	腎	平滑筋肉腫	11 年
14	自験例	1983	79	扁平上皮癌	前立腺	未分化腺癌	同時

※泌尿器系同士の重複例

発癌の発生年齢よりも高齢者に多く、平均生存期間は8.6カ月であるとしている。自験例も治療の途絶があるが、約1年の生存であった。

重複癌の発生に関して北畠ら<sup>8)</sup>は両癌が互いに独立に偶然合併したのではなく、癌に対して全身的素因を有するのか、または一癌が他癌の発生を促す結果によるものであるか、と指摘している。また小田島ら<sup>9)</sup>は、以前に陰茎癌の治療を受け、その後腎平滑筋肉腫が発生した例において、一方の癌あるいは他の既往疾患に対する治療にともなった発癌因子（たとえば放射線療法や抗癌剤）の有無を検討する必要があるとしている。いずれにしても癌発病患者の高齢化が進むなかで、老化にともなう生体の免疫能の低下を一部反映している現象とも考えられ、興味ある病態と思われる。

### 結 語

陰茎癌と前立腺癌の重複症例を報告し、若干の文献的考察を行なった。

本症例の要旨は第421回日本泌尿器学会東京地方会にて発表した。

### 文 献

- 1) 馬場謙介・下里幸雄・渡辺 漸・田島和行：重複癌の統計とその問題点。癌の臨床 17：424～438, 1971
- 2) Warren S and Gates O: Multiple primary

malignant tumors; A survey of literature and statistical study. Am J Cancer 16: 1358～1414, 1932

- 3) 平田弘昭・伊藤慈秀・妹尾 敏・坂本武司・小堀迪夫・佐藤公康・石川富士郎・中川定明：原発性重複癌について一当院における重複癌27例の報告と文献的考察。Medical post graduates 13：50～60, 1975
- 4) 菅谷公男・高橋茂喜・矢崎恒忠・石川 悟・根本真一・加納勝利・北川龍一：陰茎癌とS状結腸癌を重複した1例。臨泌 36：1073～1076, 1982
- 5) Sunder B et al.: Multiple primary tumors in a 72 year-old-woman. J Urol 129:1209～1212, 1983
- 6) 日本病理剖検輯報：第26輯，日本病理剖検輯報刊行会，東京，1984
- 7) 荒木勇雄・服部泰章・樋口章夫・川村寿一・吉田修：泌尿性器系重複悪性腫瘍の文献的・統計的考察。泌尿紀要 29：583～592, 1983
- 8) 北畠 隆・金子昌生・木戸長一郎・千原 勤・牛島 有：重複悪性腫瘍の発現頻度に関して一症例報告並びに統計的観察一。癌の臨床 6：337～345, 1960
- 9) 小田島邦男・馬場志郎・早川正道・藤岡俊夫：腎平滑筋肉腫と陰茎癌の重複症例。泌尿紀要 29：425～431, 1983

(1985年10月20日受付)